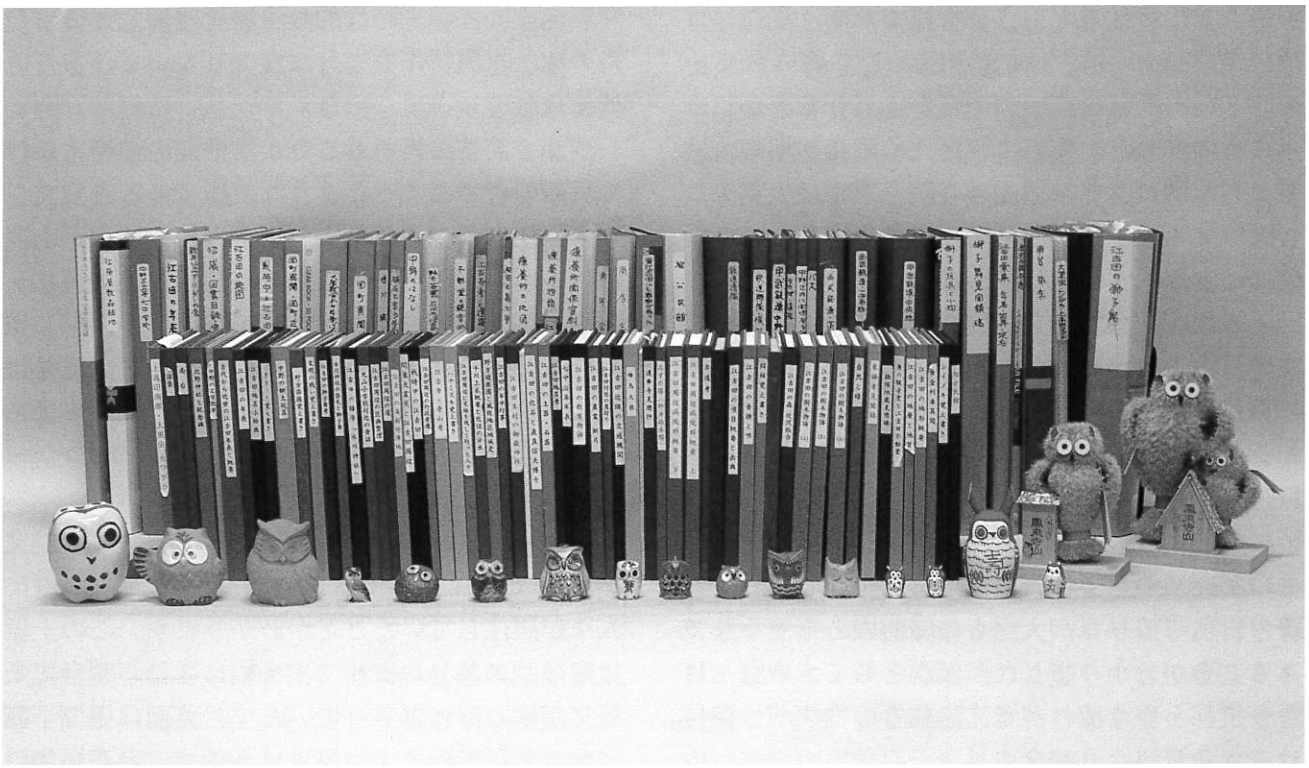
中野区立歴史民俗資料館だより

第57号

しいのき



岩渕文庫

ふるさと探究の偉人

名誉館長　三　隅　治　雄

岩渕文人氏。昭和３年沼袋に生まれ、晩年、江原小学校地域生涯学習館館長を務めて昨年５月に80歳の生涯を閉じられました。

没後、ご遺族から、書き溜めた数多くの著述と蔵書のご寄贈を受けたのですが、拝見して、驚きました。いや、感激しました。何と、中野区内の、考古・歴史・社会・産業・教育・医療・宗教・民俗・芸能・地理・地誌・交通・植物等々、さまざまな分野の一つ一つに興味を寄せ、個々に綿密な検証を行い、その結果を論文にまとめ、あるいは表に示し、それらをテーマごとに製本化し、また、ファイルに収めて遺してくださいました。

どの対象も、自分の足と目で、納得がいくまで確かめた研究業績は、区の尊い文化遺産で、岩渕氏をふるさと探究の偉人と称えるゆえんです。

文化財よもやま話

沼袋にあった？ 日仏寺

昨年10月、岩手県奥州市の斉藤実記念館から問い合わせがありました。斉藤実は、現在の奥州市で生まれ、総理大臣・海軍大臣などを歴任し、昭和11年の2・26事件で凶弾に倒れ79才の人生を閉じた人物です。

問い合わせの内容は、「〝昭和初期、斉藤実が中野の沼袋に日仏寺という寺を建てたが、現在は京都の大覚寺に移築され霊明殿として祀られている〟といった話を聞いたのだが本当だろうか」というものでした。すぐに、区史や昭和初期の古地図などを調べ、また沼袋の寺院や京都の大覚寺にも聞いてみましたが、沼袋に日仏寺があったというはっきりした資料は見つけられません。

その後、記念館からの更なる情報で、同名の寺院〝日仏寺〟が戦前から昭和30年代頃まで日野市の百草園にもあったということがわかります。昭和38年発行の『七生村史』※によると「日仏寺は斑目日仏氏により昭和９年に建てられ、昭和29年以後に廃寺となった」とありますが、沼袋や大覚寺との関連については書いていません。しかし、日野の日仏寺の写真が大覚寺の霊明殿とそっくりであることが分かりました。仮説として、中野→日野→京都という流れが考えられるのですが、裏付けできる資料などが全く見当たらないのです。中野にあったのは事実なのだろうか？そんな不安がよぎります。

その後、斑目氏の親戚の方から「詳しくは知らないが、中野→日野→京都というのは確かだ」という情報を得たので、やはり中野に存在した可能性が高そうです。現段階で分かっていることはここまでです。この謎となっている日仏寺について、何かご存知の方がいましたらぜひ情報をお寄せください。

※七生村（現在の日野市）

日仏寺『七生村史』より

大地に眠る歴史

中野区の遺跡（6）

縄文時代晩期の小氷期と呼ばれる一時的な寒冷期に遭遇した人々は、その頃、大陸で完成していた水田耕作を取り入れるようになりました。

弥生時代の始まりです。弥生時代は前期・中期・後期に分けられています。水田耕作は九州から徐々に日本中に広がっていきましたが、前期の関東地方では縄文時代的な土器を使用していましたので、水田耕作は充分に浸透していなかったと考えられています。

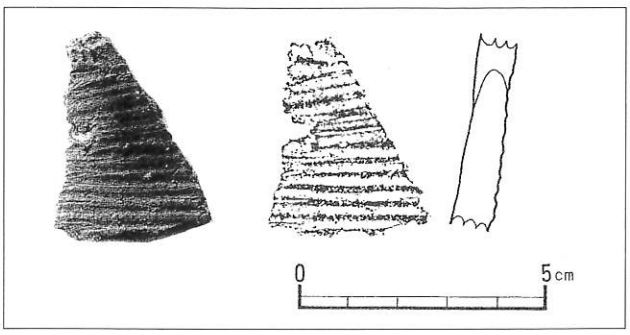
やがて前期の終わりごろから中期の前半にかけて貝殻の背でこすったような文様である条痕文を施す弥生土器が現れます。東京では日野市平山遺跡・多摩ニュータウン遺跡・町田市小山田遺跡・八王子市神谷原遺跡など多摩地域に多く出土しており、23区の武蔵野台地では板橋区久保田遺跡に認められている程度で、出土例は多くありません。

まだ、本格的な農耕社会ははじまっていなかったようです。

中野区では、松が丘二丁目の片山遺跡で条痕文を施す土器片が出土していますので、この項に人々が居住していたことがわかります。この土器は壺の胴の部分の破片で１㎝幅に４条の割合で条痕文が横方向に施されています。裏面は手で丁寧になでられています。厚さは８㎜で、明茶褐色の色調をもっています。

区内の弥生時代の資料としては今のところこれが最も古いものです。

中野区では中期の後半の遺跡はまだ未発見で大規模な集落遺跡は弥生時代後期になって出現します。　（つづく）



片山遺跡出土の条痕文土器（写真・拓本・断面）

平成20年度中野区指定文化財

「小谷津家文書〔古文書12点〕」

（中野区指定文化財：登録指定第117号）

平成20年度指定文化財について、中野区教育委員会は、中野区文化財保護審議会の審議検討を経て、歴史民俗資料館所蔵資料の中から「小谷津家文書」12点を平成20年９月12日付けで文化財に指定しましたので紹介いたします。

【小谷津家文書】

(1)　武州多東之郡雑色村御検地水帳〔寛永16年（1639）７月28日〕
美濃判竪帳（292×213）１冊

(2)　武州多東之郡雑色村御検地水帳〔(1)の写本〕　美濃判竪帳（292×195）１冊

(3)　武蔵国多東郡雑色村田方名寄帳〔寛延３年（1750）３月〕
半紙判竪帳（242×173）１冊

(4)　武州多摩郡雑色村寅御縄打帳（田方畑方）〔延宝２年（1674）４月〕
半紙判竪帳（244×173）２冊

(5)　武州多摩郡雑色村寅御縄打帳（田方畑方）〔(4)の写本〕　半紙判竪帳（248×170）２冊

(6)　武州多摩郡雑色村検地水帳〔延宝６年（1678）５月〕　美濃判竪帳（299×220）１冊

(7)　武州多摩郡雑色村検地水帳〔(6)の写本〕　半紙判竪帳（244×172）１冊

(8)　武蔵国多摩郡雑色村検地帳〔享保17年（1732）６月〕　美濃大判竪帳（312×220）１冊

(9)　武蔵国多摩郡雑色村検地帳〔(8)の写本〕　半紙判竪帳（244×172）１冊

(10)　田畑名寄　本郷村〔元禄４年（1691）５月〕　美濃大判竪帳（312×281）１冊

(11)　田畑名寄　本郷村〔(10)の写本〕　美濃判竪帳（294×208）１冊

(12)　村中石高御年貢取立帳　本郷新田〔天保７年（1836）３月〕
半紙判竪帳（270×204）１冊

小谷津家文書とは

小谷津家は、現在の弥生町南部、南台にあたる旧雑色村の名主を代々務めた旧家です。12点の古文書は小谷津家に伝わったもので、中野区立歴史民俗資料館に保管されています。小谷津家文書は全部で約550点ありますが、その中でもこれらの12点の文書は特に重要なものとして挙げることができます。

この中で(10)から(12)の史料については、現在の弥生町１～３丁目にあたる本郷村・本郷新田にかかわるもので、本来は本郷村名主秋元家に伝来したものと推察されますが、小谷津家が明治期に雑色村・本郷村・本郷新田を代表する戸長に任命されていることから、職務上、小谷津家の管理に移ったものと考えられます。

(1) 武州多東之郡雑色村御検地水帳

この史料は、寛永16年（1639）７月28日代官伊奈半十郎忠治によって行われた雑色村の検地のうち旗本佐々氏の知行分の記録で、雑色村で最古の検地帳です。田畑の一つ一つの面積と、土地所有者の名前が正確に記されており、当時の村の様子がわかります。

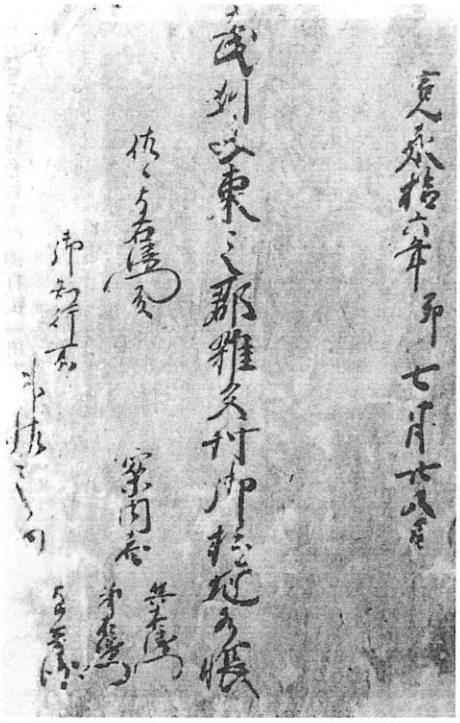
表題の武州多東之郡は平安時代末期からの古い呼称で、多摩地域の東側を指すものです。古い呼称が残されていたことを示す点でも重要です。

(2)の史料はその写本です。

※　右写真

〔用語解説〕

御検地水帳（おんけんちみずちょう）：検地とは土地の面積測量と生産高調査のことで、測量の時に縄に水をつけて誤差をなくしたことから水帳という名称がつきました。



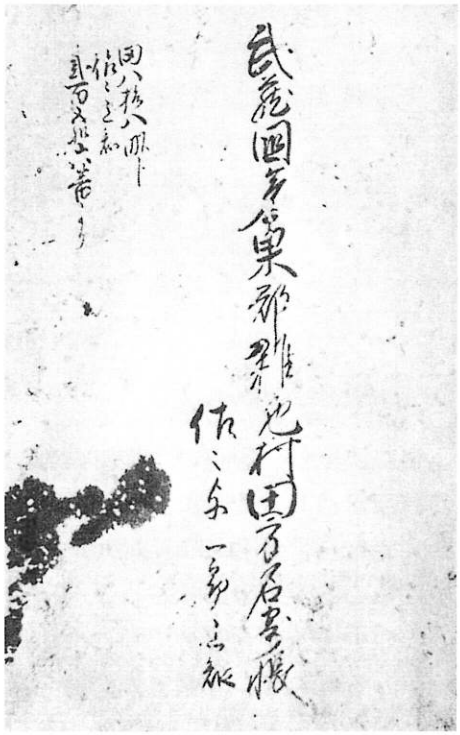
(3) 武蔵国多東郡雑色村田方名寄帳

この史料は、寛延３年（1750）に寛永16年（1639）８月９日の古帳を写本したものです。寛永期の古帳は残されていませんが、(1)の史料に引き続いて作成された土地所有者別の基本台帳であったことは間違いなく、原本が失われている以上、この写本が唯一の史料となります。

※　右写真

〔用語解説〕

名寄帳（なよりちょう）：土地の所有者別に、それぞれの面積と生産高が記載されているものです。田の場合は田方、畑の場合は畑方に分けて作成されました。



以上の史料は、寛永年間という江戸時代でも前期に属する段階のもので、稀少価値の高いものです。そればかりでなく、土地所有者の名前や当時の字名（細かい地名）や、田んぼの評価（中田・下田）なども記載されており、豊かな情報量があります。

江戸前期の周辺農村の状況を考察する上できわめて重要性が高いものです。

(4) 武州多摩郡雑色村寅御縄打帳(田方畑方)

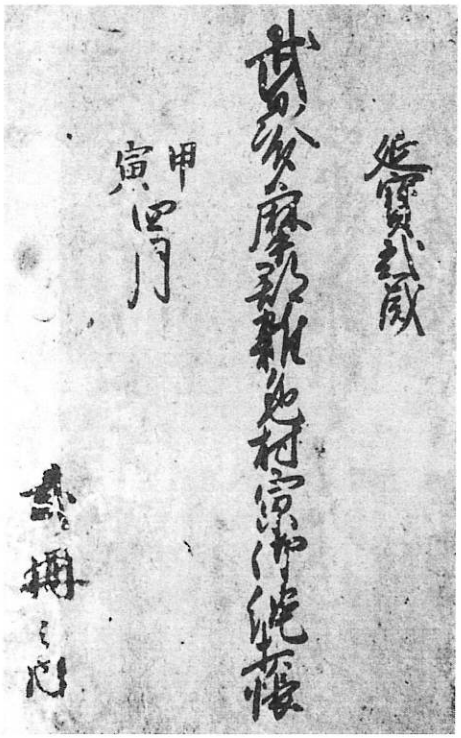
この史料は、延宝２年（1674）４月、代官中川八郎左衛門によって、雑色村の幕府直轄領部分について行われた検地帳で、田方分と畑方分の２冊で構成され完全な形で残されています。また、(1)の史料に見られた多東郡から多摩郡という標記に変わっていることも注目されます。

(5)の史料はその写本です。

※　右写真

〔用語解説〕

寅御縄打帳（とらおんなわうちちょう）：寅は寅年のことです。延宝２年は寅年で検地を行った年を指しています。縄打とは検地の測量のおり、縄を巻尺の代わりとして２人で持って、距離を測るありさまからついた名称です。



(6) 武州多摩郡雑色村検地水帳

この史料は延宝２年の幕府直轄の検地に引続き延宝６年（1678）５月に旗本佐々氏の所領分を検地した記録です。

(7)の史料はこの写しです。

これらの史料の年代である寛文～延宝期（1660～80年）は、幕府直轄領の検地が集中的に行われた時期です。その理由は、江戸時代初頭から安定して行われてきた耕地開発の進展の結果、それまで地主の下で小作人として働いていた人々が、自分の土地を所有するようになったことが挙げられます。これを自営農民の成長といいます。そのため、幕府はこれらの自営農民を正確に把握し、年貢の負担者として確定して、支配強化を図ったのです。

このことは、小谷津家文書の中からも読み取ることができます。たとえば、田畑のランク付について寛永16年（1639）の検地帳と延宝６年（1678）の検地帳と比較してみると、田畑のランク付が上・中・下の３ランクから上々・上・中・下・下々の５ランクに細分されています。さらに農地ではない萱野でさえも上・中・下の３ランクに分けて、土地に対する支配がきめ細かくなり、強化されたことがうかがえます。

※享保17年（1732）６月
武蔵国多摩郡雑色村検地帳

⑻　武蔵国多摩郡雑色村検地帳

この史料は享保17年（1732）６月に行われた新田に対する検地帳です。この検地で扱われた田畑はわずかに四ヶ所しかなく、それも下々田以下のランクである見付田といわれるものでした。

享保期は８代将軍吉宗によって武蔵野の新田開発が盛んに奨励された時期です。この史料は新田開発政策によって施行された検地ですが、雑色村内には、新たな耕地を開拓する余地はなく、形ばかりの新田開発が行われたことが示されています。

⑼は⑻の写本です。

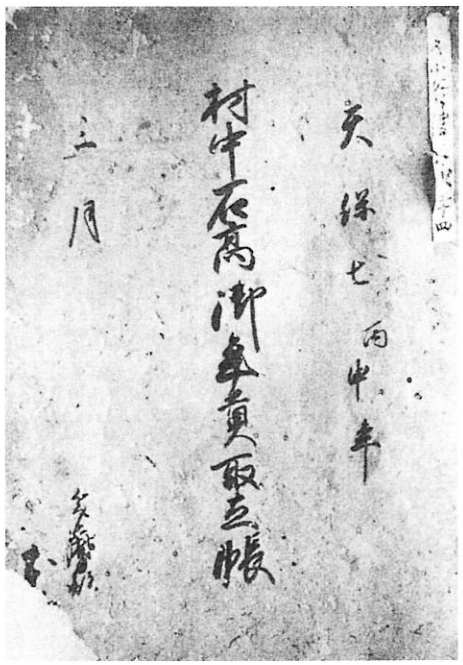
※　写真は前ページ下

⑽　田畑名寄　本郷村

この史料は旧本郷村に関する唯一の記録で、元禄４年（1691）５月に行われた検地の記録です。23名の土地所有者の名前や、所持地の面積、生産高、字名など元禄期の本郷村の状況を復元できる豊富な内容を持っています。また、本郷村について現存する唯一の史料でもあります。

⑾は⑽の写本です。

※　右写真



⑿　村中石高御年貢取立帳　本郷新田

この史料は本郷新田に天保７年（1836）３月に課せられた年貢の取り立て帳です。土地所有者１人１人について年貢支払額が細かに記載されています。本郷新田は新田といってもその実態はすべて畑であり、年貢も現金払いであったことがこの史料によって、明らかにされています。

本郷新田は延宝２年（1674）に本郷村から分かれて成立し、元禄３年（1690）に検地が行われたことが記録されていますが、古文書として残されているのはこれが唯一の実物史料です。

※　右写真

歴史的価値

上記の史料のうち、⑴から⑼の史料は雑色村にかかわるものであり、⑴～⑺については江戸時代前期の雑色村の耕地拡大過程が追えると同時に、自営農民が成長し村落基盤が確立した歴史動向を示す貴重な史料です。また、⑻⑼は享保の改革による新田開発奨励政策が江戸近郊に実施されたことを証する史料です。

⑽⑾は江戸周辺農村が確立安定した元禄期（1688～1703）の本郷村の状況を知るための史料として、⑿は本郷新田に関するものとして、ともに唯一の史料です。

【参考文献】

伊藤好一・根岸茂夫・関　利雄1983『小谷津家文書』第１巻　中野区教育委員会
伊藤好一・根岸茂夫・関　利雄1984『小谷津家文書』第２巻　中野区教育委員会

古文書つづり

「知ってるつもり」の 落し穴

一般に人間が得る情報は視覚からが大半であり思惟すらも視覚を基にしているため、物事の印象は与えられた映像で大きく左右されます。歴史の分野でいえば、何らかの事柄に関するイメージがテレビの時代劇で決まるというのが極端であると同時にありがちな事例といえるでしょう。

以前、20代前半くらいの男性に「徳川吉宗が白馬に乗って走った海岸はどこ？」と質問されて絶句してしまいました。これに限らず馬上で斬り結ぶ合戦風景から全員ワラ草履を履いている町なかの様子まで、映像上の嘘は枚挙に暇ありません。そして犯罪者の人相書もそのうちの一つです。

少し前の時代劇では、微妙な出来の似顔絵が高札に張られている場面がしばしば見られました。現在、交番の前などにある手配書と似ていますので見る側に違和感はありませんからそんなものかと思いがちです。ところが実際はというと…

↑は寛政７年(1795)の人相書の控え冒頭部分。前年末に下総国流山で起った事件の犯人です。列挙してあるのは年齢・出身地・身長・毛髪その他身体的特徴と言葉の癖・服装で、一見して明らかなように「人相書」であって「似顔絵」ではありません。こうした文字のみの情報がどれだけ役に立つのか心配になったりしますが、考えてみますとコピー機のない時代ですから絵や図の複製は容易にできません。この手配書が最終的にいくつの村へ通達されたのか、厳密な数は不明ながら３桁は確実でしょうし、その通達も複数村での回覧形式のため各村で控えを取る時に元絵とズレが生じるのは自明です。こうした理由により当時の手配書は画像でなく文字情報で伝えられたのでした。

常日頃メディアから得ている情報(イメージ)も、実は誤解や作為が混じっているのかもしれませんね。

中野往来

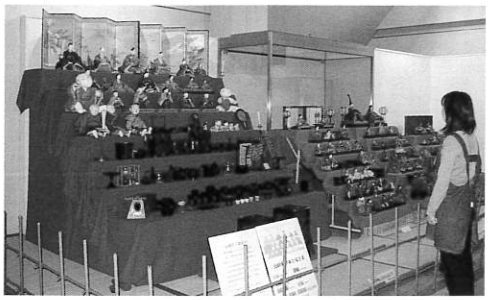
中野のおひなさま展

当館の「おひなさま展」は平成元年の開館以来20年間続いています。第１回目は、たった３組だった雛人形も回を重ねる毎に増え、平成21年には、20年の間に寄贈された雛人形100組を一挙に展示するまでになりました。

その中で一番規模の大きい旧江古田村名主を務めた山崎家の雛段飾りは、大工さんに頼んで段を組み立て、幅240cm、高さは鴨居より高く、２部屋使って飾ったといいます。江戸時代から明治時代までの代々夫人が嫁ぐ際持参したという内裏雛６組と、天明年間の五人囃子、赤ん坊くらいの大きさの御所人形や三つ折人形などがあります。珍しい道具に「鯉桶」があります。江古田村は海が遠く、お祝い事の時には、鯛ではなく鯉を贈る習慣があったことからきた雛道具です。

中野のおひなさま展は、様々なおひなさまが並びます。その店で一番大きいものをと買い求めた立派な御殿飾りのおひなさま・物が不足していた昭和20年、輸出用に準備されたまま残されていたものを鷺宮から横浜港まで大八車で買いに行ったおひなさま・双子の姉妹のお揃いのおひなさま・戦時中、山形まで疎開したおひなさま……。また、それぞれの木箱に丁寧に墨で贈り主の名前を書いてあったり、おひなさまの冠から五人囃子の笛太鼓まで一つ一つきちんと紙にくるみ人形に持たせ、お嫁に出すといって寄贈くださる方もおられ、いろいろな思いが込められているのが伝わってきます。

このようにそれぞれの家庭で大事にされてきた品々を資料館で大切に保存し、多くの方に見ていただきたいと考え、次回20周年記念展第２弾は「みんなお宝、みんなのお宝」を開催します。



事業報告

各種事業経過

2008年10月～2009年３月

事業名	内容	期間
企画展	「旧家の足あと―上鷺宮早舩家資料―」 開館20周年記念「おひなさま展」	9/30～11/30 2/3～3/8
所蔵名品展	「江古田獅子舞の世界」 「ひらける　けしき」	9/13～11/2 12/16～1/17
年中行事展	「酉の市」	11/1～11/30
古文書講座	講師：大友一雄氏（国文学研究資料館教授） 講師：笠原綾氏（日本放送協会学園専任講師）	10/4・18・25 11/1
体験講座	「伝統芸能〔能〕の世界入門」 講師：川口晃平氏（観世流能楽師）	11/13・20
公開事業	秋季「山﨑家茶室書院公開」	10/1～11/30
埋蔵文化財対応	江古田三丁目15番民有地立会調査 江原町二丁目31番民有地試掘調査（国庫補助金対象事業） 白鷺二丁目48番区有地試掘調査（国庫補助金対象事業） 南台五丁目34番民有地立会調査 弥生町四丁目15番民有地立会調査 江古田一丁目34番民有地立会調査 本町三丁目15番民有地試掘調査（国庫補助金対象事業） 江古田一丁目24番民有地試掘調査	9/29 10/21 11/26・27 1/23 1/26 2／12 2／18 3／4
その他	昭和なつメロ鑑賞会・講演会　講師：八児雄三郎氏 小学校３・４・６学年総合学習見学15校	10/10、3/13 10月～２月

寄贈資料一覧

2008年８月～2009年１月　　敬称略：受入順

資料名	点数	氏名
お囃子練習道具	4	高井　一成
戦前の写真	一括	原田　保子
家具調テレビほか	一括	宇佐美恵朗
吸入器	1	武内　一枝
軍事郵便葉書	2	三宅　朝昭
江古田獅子舞写真	1	深野　　勇
三味線	1	杉浦ヒサコ
郷土民具・人形	一括	岩渕　文人
映写機	1	片山ひとみ
雛人形	一式	石田　　好

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

入館状況

2008年９月～2009年２月（延べ143日間）　　（人）

一般	団体	学校教育	合計
13,401	125	1,107	14,633

発行年月日　2009年４月１日

編集・発行　山﨑記念 中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022　東京都中野区江古田４―３―４
☎ 03 (3319) 9221　FAX 03 (3319) 9119